世界文学全集 20

ドストエーフスキイ

カラマーゾフの兄弟

II

米川正夫 訳

河出書房新社

世界文学全集 20 ドストエーフスキー II

© 1963

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和35年 9月25日　初版発行
昭和38年 1月25日　6版発行

定価 320円

訳　　者　米川正夫
発 行 者　河出孝雄
印 刷 者　草刈親雄
装　　幀　原　弘

印　　刷：中央精版印刷株式会社
製　　本：株式会社文勇堂
本文用紙：日本紙業株式会社
同 納 入：東邦紙業株式会社
クロース：日本クロス株式会社
同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
電話 東京(291)3721～7
振替口座東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

カラマーゾフの兄弟　Ⅱ

第八編　ミーチャ……三
第九編　予　審……二一六
第十編　少年の群れ……三〇五
第十一編　兄イヴァン……三六九
第十二編　誤れる裁判……三九九
第十三編　エピローグ……五二六
年　譜……五五五
あとがき……五六三

カラマーゾフの兄弟 Ⅱ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

主要人物

フョードル・パーヴロヴィッチ・カラマーゾフ　金をふやすことが上手で、居候から小地主にまで成り上がった男。あくことを知らぬ好色漢。非業の死をとげる。

アデライーダ・イヴァーノヴナ　フョードルの先妻。富裕な家庭に生まれながら、フョードルを買いかぶって結婚し、一子をもうけたが、のちあいそうをつかして、他の男と駆け落ちする。

ソフィヤ・イヴァーノヴナ　フョードルの後妻。ふたりのむすこを生んで死ぬ。

ドミートリイ・フョードロヴィッチ(ミーチャ)　フョードルの長男、退役将校。純朴で正直な情熱家で、放縦な生活におぼれている。二十八歳。

イヴァン・フョードロヴィッチ　フョードルの次男。大学出の秀才。無神論者。二十四歳。

アレクセイ・フョードロヴィッチ(アリョーシャ)　フョードルの三男。僧院の長老に師事する聴法者。天使のように清純な博愛家。二十一歳。

スメルジャコフ　フョードルが乞食女に生ませた私生児。癲癇病み。カラマーゾフ家の料理番をつとめていたが、下劣な奸知にたけた悪魔的な人物。

ゾシマ長老　アリョーシャの師。イヴァンがこの小説の否定的な思想的中核であるのにたいして、ゾシマ長老は肯定的な思想的中核をなしている。

ラキーチン　神学校出の学生。アリョーシャと同じ僧院に住みながら雑誌経営者を理想としている軽薄才子。

カチェリーナ・イヴァーノヴナ(カーチャ)　中佐令嬢。ミーチャの許婚。のちにイヴァンを愛するようになる。

グルーシェンカ(アグラフェーナ・アレクサンドロヴナ)　初恋の男に捨てられて、この町の老商人の妻となっている。奔放な娼婦型の女。のちミーチャと恋し合う。

ムッシャローヴィッチ　グルーシェンカの初恋の男。卑劣なポーランド人。

ホフラコーヴァ夫人　裕福な地主の未亡人。すこし頭の調子のおかしな女。

リーズ(リーザのフランスふうの呼び方)　ホフラコーヴァ夫人の娘。アリョーシャの幼な友だちで、相愛の間柄。

第八編　ミーチャ

第一　商人サムソノフ

グルーシェンカが新生活を目ざして飛んで行くとき、自分の最後のあいさつを伝えるように『命令し』、かつ自分の愛の一ときを生涯記憶するように言いつけた当の相手のドミートリイ・フョードロヴィッチは、そのとき恋人の身の上に起こったことを夢にも知らないで、やはり同様に恐ろしい惑乱と焦燥の渦中にあった。この二日間、彼は想像もできないような心の状態にあって、じっさい、後に自身でも言っていたように、脳膜炎でも起こしはしないかと思われるほどであった。昨日の朝、アリョーシャも彼を捜し出すことができなかったし、イヴァンも同じ日に、旗亭における兄との会見をはたし得なかった。彼の下宿している家の人たちが、当人から口どめされて行く先を隠していたのである。彼自身の言葉を借りて言うと、彼はこの二日間、『運命とたたかっておのれを救わんがため』字義どおりに八方へ飛びまわっていたのである。そればかりか、たとえ一分間でも、グルーシェンカから監視の目をはなして、よそへ行くのは恐ろしいことであったが、ある火急な用事のため幾時間かのあいだ、町の外までも出かけたのである。これらのことは、その後きわめて詳細確実に記録の形をとって闡明せられたが、今は彼の運命の上に突如として爆発した、恐ろしいカタストロフにさきだつ二日間、彼の生涯において最も恐ろしい二日間の物語ちゅう、必要欠くべからざる部分のみを、事実ありのまま述べることにしよう。

グルーシェンカはほんとうに心から、ほんのわずか一ときではあるが彼を愛した。それは事実である。しかし、同時に彼を苦しめもした。ときとすると、真実残酷で、無慈悲な苦しめ方をした。彼にとって何より苦しいのは、女の意向を少しも推察できないことであった。きげんをとったり、力ずくでなびかせようというのも、やはりできない相談であった。彼女が何ものにも屈服しないどころか、かえって立腹のあまり背を向けてしまうということは、彼も当時はっきり了解していた。そのころ、彼は至極もっともな疑いをいだいていた。ほかでもない、彼女自身も何か心内の苦闘を経験しているのではあるまいか、何か非常な迷いにおちているのではあるまいか、何か断行しようと思いながら、依然として決心がつかぬのではあるまいか、という疑いであった。それゆえ、ドミートリイが、彼女はときとすると、情欲に燃え

立つ男を憎んでいるに相違ない、とこんなことを想像してぞっとしたのも、あながち根拠のないことではなかった。

じっさいそういうことがあったかもしれない。しかし、グルーシェンカが何を思い悩んでいるか、どうしても彼には了解できなかった。彼を苦しめる問題は、『自分ミーチャか、それとも父フョードルか？』という、この二つに縮めてしまうことができるのであった。ここでついでに、一つの確固たる事実を示しておく必要がある。彼は、父フョードルがぜひグルーシェンカに正当の結婚を（もし、まだ申し込んでいなかったら）申し込むにちがいないと、かたく信じて疑わなかった。あの『助平じじい』がただの三千ルーブリでおしまいにする気でいるなどとは、片時も信じたことがない。ミーチャがこういう結論を下したのは、グルーシェンカとその性質をよく承知していたからである。こういうわけであるから、グルーシェンカの苦しみも迷いも、ただただ親子のうちどっちを選んだらいいか、どっちが自分にとってためになるかを、自分でも決めかねるために起こるのだ、とこんなふうにミーチャがときどき考えたのも、決してむりからぬ次第であった。

例の将校、すなわちグルーシェンカの生涯に一転期を画した男、グルーシェンカがあのした興奮と恐怖をもって、到着を待ちかねていた男のことは、奇妙な話であるが、その二、三日のあいだ心に浮かべたこともない。もっとも、グルーシェンカがこのころ彼に向かって、この男のことをおくびにも出さなかったのは事実であるが、彼女が一月前に昔の誘惑者から手紙を受け取ったことは、彼も十分承知していたし、手紙の内容も大部分は知っていたのである。当時グルーシェンカはふと毒念の発作に駆られて、彼にこの手紙を見せたが、ふしぎにも、彼はこの手紙になんの価値をも認めなかった。理由を説明するのはむずかしいことであるが、あるいは、単にこの女を対象とする肉親の父親との醜悪な、恐ろしい争闘に心をひしがれていたため、少なくともこれと同時に、より恐ろしい、より危険なことが出来しようなどとは、しょせん想像することができなかったからかもしれない。五年も姿をくらましていた後に、とつぜんどこからか飛び出したという男の存在など、てんから信じようとしなかった。まして、その男が近いうちにやって来るなどとは、いよいよほんとうにならなかった。

それに、ミーチャが見せてもらった『将校』の最初の手紙には、この新しい競争者の来訪も、きわめて漠然と書いてあるにすぎなかった。しかも、手紙ぜんたいはおそろしくあいまいで、高調された文句と咏嘆的な調子に満ちていた。ついでにちょっと注意しておくが、そのと

きグルーシェンカは、来訪の日時をやや具体的に語ってある手紙の最後の数行を、ミーチャに隠して見せなかった。それに、シベリヤから送ったこの手紙にたいして、傲慢な軽蔑の色が、その瞬間、ひとりでにグルーシェンカの顔に浮かんだのを、ミーチャはさとくも見てとった。彼はこんなことを思い出したのである。その後グルーシェンカは、この新しい競争者と自分との関係が、どんなふうに進んだかを、金輪際ミーチャに知らせなかった。というわけで、彼はだんだんとこの将校のことを忘れていった。

彼はただこう考えた。たとえ何事が起ころうとも、どんなふうに局面が一変しようとも、父フョードルとの最後の衝突は、もはや近々と目前に押し寄せているから、何よりもまっさきに解決を見るに相違ない。彼は胸のしびれるような思いをしながら、グルーシェンカの決心を今か今かと待っていた。そして、その決心は何かの感激によって、とっさの間に生じるものと固く信じていた。もし彼女がとつぜん、『わたしを連れてってちょうだい、わたしは永久にあんたのものよ』と言ったら、――それで万事は終結するのだ。彼はすぐさま女の手をとって、世界の果てへつれて行く。おお、むろんすぐにできるだけ遠くへ連れて行く。たとえ世界の果てでないまでも、どこかロシヤの果てへなりと連れて行く。そうして、ここで彼女と結婚して、ここのものも向こうのものも、だれひとりとして自分たちのことを知るものがないように、秘密にふたりで暮らして行く。そのときは、おお、そのときこそはさっそく新しい生活が始まるだろう！　こんなふうにぜんぜん別様な、更新された、しかも有徳な生活を（ぜひとも、ぜひとも有徳な生活でなくてはならない）、彼は感激の情をいだきながら、絶えず空想した。彼はこの復活と更新を渇望しているのであった。もともと自分のすきで落ちこんだいまわしいどろ沼が、すでにたえ得られぬほど苦しくなったので、彼はこんな立場におかれた多数の人と同じように、何よりも土地の転換に望みを嘱したのである。ただもうこんな人間がいなかったら、こんな事情がなかったら、こんないまわしい土地を飛び出しさえしたら、――すべてはたちまち更生して、新しい進行を始めることができるのだ！　これが彼の望んでやまぬところであった。これが彼の憧憬するところであった。

しかし、これはただ問題が幸福な解決を告げた、第一の場合にすぎなかった。まだもう一つの解決がある。もう一つ恐ろしい結果を予想することができる。もし彼女がとつぜん、『さあ、出てお行き、わたしは今フョードルさんと相談して、あの人と結婚することに決めたから、おまえさんには用がないんだよ』と言ったら、――そのと

きは……そのときは……しかし、ミーチャは、そのときどうするか、自分でも知らなかった。最後の瞬間まで知らなかった。その点は彼のために弁護しなければならない。彼はしかとした計画を持っていなかった。犯罪行為をたくらんではいなかった。彼は、あとをつけまわして、間諜のようなまねをして苦しんでいたが、それでもやはり、第一の幸福な解決を予想して、そのほうの準備ばかりしていた。それのみか、ほかの想念をいっさいおい払おうとしていたほどである。しかし、ここにまったく種類を異にした苦痛が生じた。ぜんぜんあらたな第二義的な、とはいえやはり致命的な、解決のできない事情がもちあがったのである。

ほかでもない、もし彼女が、『わたしはあんたのものよ、わたしを連れて逃げてちょうだい』と言ったとき、どうして連れて行ったらいいだろう？　自分はそれにたいする方法、金をどこに持っているのだ？　それまで何年かの間フョードルからもらっていた金が、ちょうどそのときすっかりなくなってしまったのである。もちろん、グルーシェンカには金があるけれども、この点に関してはとつぜん、ミーチャの心に、恐ろしいプライドが生じた。彼は自分で女を連れて逃げ、女の金でなく自分の金で、新しい生活が営みたかったのである。女から金を取るなどということは、想像もできなかった。そんなことは考えただけでも、苦しいほどの嫌悪を感じるのであった。とはいえ、今ここでこの事実を敷衍したり、分析したりするのはやめにして、ただそのころ彼の心の持ち方がそんなふうになっていたと、これだけのことを言っておこう。彼がどろぼうのようなやり方で着服したカチェリーナの金に関する秘密な心の苦しみから、間接に無意識にこういう心持ちが生じるのは、きわめてありうべきことであった。『一方の女にたいしても陋劣漢となっているのに、またもやそんなことをしたら、いま一方の女にたいしても、さっそく陋劣漢となってしまう』当時こんなふうに考えていたと、彼はあとになって告白した。『それに、グルーシェンカだって、もしこのことを聞いたら、そんな心のきたない人はいやだと言うに相違ない』で、要するに、この金をどこで調達したらいいか、どこでこの運命的な金を手に入れることができるか、これが問題なのである。もしこれができなければいっさいが瓦解してしまう、いっさいが成り立たなくなる。『しかも、それがただただ金のたりないためなのだ、おお、なんて浅ましいこった！』

さきまわりをして言っておくが、彼はこの金をどこで調達したらいいか、ちゃんと承知していたかもしれぬ。それどころか、その金がどこにあるかということまで、承知していたかもしれぬ。しかし、これについてくわし

いことは何も言うまい。それはあとですっかり明瞭になるからである。けれども、彼のおもなる不幸はこの点にふくまれているのだから、おぼろげながらちょっと言っておかねばならぬ。このあるところに秘められた金を使うためには、この金を使う権利を得るためには、あらかじめカチェリーナに三千ルーブリ返却しなければならぬ。それができなければ、『おれはこそこそどろぼうになる、陋劣漢になる。おれは新しい生活を陋劣漢として始めたくない』とミーチャは腹を決めた。それゆえ、もし必要があったら、全世界をくつがえしてもかまわない、どんなことがあっても、あの三千ルーブリはぜひともまず一番に、カチェリーナへ返さなければならぬ。

この決心がいよいよという揺るぎのない形をとったのは、いわば彼の生涯における最後の数時間、すなわち二日前の夕方、街道でアリョーシャと最後の会見をしたときのことである。それは、グルーシェンカがカチェリーナを侮辱したすぐあとの出来事で、ミーチャはその話をアリョーシャから聞いたとき、自分は悪党であることを自認して、『もしそれであの女の腹が癒えるなら、喜んで悪党の名前をちょうだいする』とカチェリーナへ伝言するように言いつけた。そのとき、その晩、弟と別れてから、彼は憤激に駆られて、こういう感じを起こした。『たとえだれかを殺して追いはぎをしてもいい、とにかくカーチャの負債は返さねばならん』『よしんば殺して金をはいだ人にたいして、また世間のすべての人にたいして、殺人者となり盗人となって、シベリヤへ送られてもかまわない、ただカーチャの口から、あの男はわたしにそむいておきながら、わたしの金を盗み取って、その金で有徳の生活を始めるんだとかいって、グルーシェンカといっしょに駆け落ちした、などと言われるのはたまらない！　それはがまんできない！』とミーチャは歯ぎしりしながら、こうひとりごちた。どうかすると、ほんとうに脳膜炎でも起こしそうに思われることがあった。が、今のところ、まだ彼は奮闘をつづけていた……

ここにふしぎなことがある。全体なら、このような決心をとった以上、彼の心に残るものは絶望のほか何もあるまい、と思われるのが至当である。なぜなら、彼のような裸一貫の男が、三千という大金を急にととのえる当てがないではないか。しかし、それでいながら、彼はこの三千ルーブリが手にはいる、ひとりでにやって来る、天からでも降って来ると、最後まで望みを失わないでいた。まったくドミートリイのように、生涯相続によって得た金を湯水のようにつかう一方で、金がどんなにしてもうかるかについて、なんの観念も持っていない人間には、こういう考えも確かに起こりうるものである。おとといアリョーシャに別れたすぐあとで、とほうもない妄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

想の嵐が彼の頭に吹き起こって、すべての思想をめちゃめちゃにかき乱した。こういうぐあいで、彼はこのうえない無鉄砲な仕事に着手することになった。しかし、こんな人間がこんな境遇におちいると、とうてい不可能な夢のような仕事が、苦もなくやすやすと成功するように思われるものである。

彼はとつぜん、グルーシェンカの保護者たる商人サムソノフを訪問して、ある一つの『計画』を提供し、この計画を担保として、必要な金を一時に引き出そうと決心した。商業的方面から見たこの計画の価値を、彼は少しも疑わなかった。ただ向こうが単に商業的方面のみから見ないとすれば、サムソノフが自分のとっぴな行動をどんなふうに観察するか、という点に疑いが存するばかりであった。ミーチャはこの商人の顔を知っていたけれども、別段ちかづきというわけでもなければ、かつて口をきいたこともなかった。しかし、どういうわけかずっと前から、彼の内部にこういう信念が築かれていた。ほかではない、もしグルーシェンカが潔白な生活を営みたい、将来有望な男と結婚したいと言いだしたら、いま虫の息でいるこの老好色漢も、決して反対しないであろう。いや、反対しないどころか、かえってそれを希望しているかもしれぬ。そして機会さえ至ったならば、進んで助力するかもしれない。何かのうわさを信じたものか、それともグルーシェンカの言葉を基としたものか、とにかく老人は、グルーシェンカのために、父フョードルより自分のほうを選ぶつもりでいるらしいという結論さえ、彼は引き出したのである。

この物語の読者の多数は、こうした助力をあてにしたり、自分の花嫁を以前の保護者の手から奪おうなどともくろんだりするミーチャの行動が、あまり粗暴で不注意なように思われるかもしれぬ。筆者はただこれだけ言うことができる。グルーシェンカの過去はミーチャの目から見て、もはやとくに完結したもののように思われた。彼はこの事件を同情をもってながめていた。で、もしグルーシェンカが、『わたしはあなたを愛しています、わたしはあなたと結婚します』と言ったら、たちまちそれと同時に、ぜんぜん新しいグルーシェンカが始まる。それにつれて、彼はぜんぜん新しいドミートリイとなって、悪行などごうもなく、善行ばかり積むようになる。そして、ふたりは互いにゆるしあって、ぜんぜんあらたに自分たちの生活を始めるのだ、と彼は炎のような熱情を燃やしながら、ひとりぎめに決めていた。商人クジマー・サムソノフにいたっては、彼はこの老人を目して、以前の堕落せるグルーシェンカの生活における宿命的な人間だと思っていた。しかし、彼女はこの男を愛していなかったうえに、この男も同様過去の人となって活動を終え

ているから、もう今はまったく存在しないも同じことである、とこう考えたのである。それに、彼は今この男を人間として扱うことができなかった。なぜと言うに、町の人がだれでもみんな知っているとおり、この男はただ一個の病める廃墟であって、グルーシェンカにたいしても、ただ父親としての関係を持続しているだけで、決して以前のような基礎の上に立っていない。しかも、これはだいぶ前からのことであって、もうかれこれ一年ばかりになる。が、なんといっても、こうしたミーチャの行動には、多分の稚気がふくまれている。じっさい、彼はいろんな背徳を重ねているけれど、非常に稚気のある男なのである。この稚気のために彼はまじめでこんな断定さえ下した、――老サムソノフは今あの世へ去るにのぞんで、自分とグルーシェンカの過去を心から後悔している。それゆえ、グルーシェンカも、今は決して害のないこの老人より以上に、親切な保護者たり親友たる人を、だれひとりも持っていない。

アリョーシャと原の中で談話を交換した後、ミーチャはほとんど夜っぴて、まんじりともしなかったが、翌朝十時ごろ、彼はサムソノフの家を訪れて取次ぎを命じた。この家は古い、陰気くさい、恐ろしくだだっ広い二階建てで、それに付属したさまざまな建物や、離れなどが邸内にあった。下のほうには、もう女房子のあるむすこがふたり、思いきって年とったサムソノフの妹、それからまだ嫁入りせぬ娘、これだけの大人数で暮らしていた。また離れのほうには、番頭がふたり、住まいを構えていたが、そのうちひとりは、やはり大人数の家族をかかえている。こうして、子供らも番頭も、手狭な中で押し合うようにしているのに、二階は老人ひとりで占領して、自分の看病をしてくれる娘さえ、そこで寝起きすることを許さなかった。娘は一定の時刻にはもちろん、時を定めぬ呼び出しにあうたびに、久しく持病の喘息に悩んでいるにもかかわらず、いちいち下から駆けあがらねばならなかった。

二階には、商人社会の古い風習にしたがって飾られた、大きな堂々たる部屋がたくさんあった。その中には、マホガニーの不かっこうなひじいすやただのいすが、壁ぎわに沿うて長い単調な列をなしているし、ガラスのシャンデリヤにはおおい布がかぶさっているし、いくつかの鏡は窓と窓の間に、あいそげもなくかかっている。これらの部屋は、まるでがらんとして人の気配もしない。それは病主人が小さな一室、すみのほうに片寄った自分の寝室に、閉じこもっているからであった。病室には、髪を頭巾にくるんだ老婆がつき添っているほか、ひとり『若いの』が控え室の腰掛けにしじゅうすわっていた。老人は足がはれあがったため、もうほとんど歩くことができ

なかった。ときおり、かわのひじいすから身を起こすのと、老婆の両手にささえられて、日に一度か二度、部屋をひとまわりするくらいなものであった。彼はこの老婆にたいしても、厳重で口数が少なかった。『大尉さん』の来訪が報じられたときも、彼はすぐ追い返せと命じた。けれど、ミーチャはたって面会をこい、いま一ど取次ぎを頼んだ。サムソノフは『どうだ、見かけはどんな様子だ、酔っ払ってはおらんか、乱暴はしないか？』などと、仔細に『若いの』に根掘り葉掘りした。そして『しらふですけれど、どうしても帰ろうとはしません』という答えを得たが、老人はふたたび拒絶を命じた。ミーチャはこういう場合を予想して、そのためにわざわざ紙と鉛筆を用意して来たので、さっそく紙の切れ端しにきびきびした筆跡でたった一行、『アグラフェーナ・アレクサンドロヴナに緊切な関係を有する、最も重大なる事件につき用談あり』と書いて、老人のところへ持たしてやった。老人はちょっと思案してから、お客さまを広間へ通せと、『若いの』に言いつけた後、下にいる乙むすこのところへ老婆をやって、すぐ二階へ顔を出すようにという命令を伝えた。この乙むすこというのは六尺豊かな大男で、方図の知れないほどの力を持っていたが、顔はきれいにそり上げて、ドイツ風のなりをしていた（父のサムソノフは、純ロシヤ式の上着をつけ、あごにもひげをたくわえていた）。彼は猶予なく無言のままあがって来た。ふたりの兄弟は父の前へ出ると、もうびくびくものであった。父親がこの元気者を呼び寄せたのは、ミーチャにたいする恐怖のためではなかった。彼は決してそんなおくびょう者ではない。ただ万一の場合をおもんばかって、証人としそばにすえておく、というくらいの意味であった。

むすこと『若いの』とにささえられて、とうとう彼はふらふらと広間へ歩み出た。もちろん、彼自身も、かなり強い好奇心を感じたものと考えなければならぬ。ミーチャの待っているこの広間は、憂愁の気で人の心を腐蝕するような、あいそのない大きな部屋である。二方からあかりがさしこむようになっていて、大理石模様に塗った壁には、中二階風になった渡り廊下があって、おおい布をかぶせたガラス張りの大きなつり燭台が三つもしつらえてあった。ミーチャは入り口の戸のそばにある小形のいすにすわって、神経的な焦燥をこらえながら、運命の解決を待っていた。ミーチャのいすから十間ばかり離れた反対の戸口に老人が現われたとき、彼はいきなり席を立ちあがって、例のどっしりした軍隊式の歩調で、大またに老人のほうへ進んで行った。彼は礼儀ただしい服装をしていた。きちんとボタンをかけたフロック、手に持った山高帽子、黒い手袋、すべて三日まえ長老の庵室で催さ

れた、父兄弟など家族の人たちの会見に出席したときの扮装と、そっくりそのままであった。

老人はものものしくいかめしい様子をして、じっと立ったまま、相手を待ち受けていた。で、ミーチャは自分がそのそばへ寄って行く間に、この老人は自分という人間をすっかり見つくしてしまった、ととっさの間に直覚した。が、それと同時に、彼はサムソノフの顔が、このごろ急に恐ろしくはれあがったのに、一驚を喫した。それでなくてさえ厚い下くちびるが、今はまるで牛乳菓子のぶら下がったようなかっこうになっている。彼はものものしくいかめしい様子で客に会釈した後、長いすのかたわらなるひじいすへ腰をかけるように指さし、自分はむすこの手にもたれかかったまま、病的にのどをぐるぐる鳴らしながら、ミーチャの真向かいに置いた長いすに座を構え始めた。その病的な努力を見ているうちに、ミーチャは早くも後悔の念を感じた。そして、この男のものものしい不安げな顔にたいすると、今の自分がつまらないものに思われて、かすかな羞恥の情もわき出したほどである。

「あなた、わたしに何ご用ですな？」ようやく席に落ちついた老人は、いかめしいけれど慇懃な調子で、ひと言ひと言区切るようにゆっくりと言いだした。

ミーチャはぎっくりして、思わず座を飛びあがったが、すぐまた腰をおろした。それからさっそく早口な神経的な調子で、身ぶり、手まねを入れながら、興奮しきった様子で声高に話しだした。どんづまりまで行きづまって、滅亡の淵に瀕しながら、最後の逃げ道を求めているが、もしそれに失敗したら、今すぐにも身投げをしかねない男だ、ということは、よそ目にも明らかであった。サムソノフ老人も一瞬の間に、これを見てとったらしい。もっとも、その顔は彫刻のように、依然として冷やかであった……

「クジマー・クジミッチ、あなたはおそらくわたしと父フョードルとの衝突を、一度ならず耳にされたこととぞんじます。父はわたしの生母の死後、遺産を横領してしまったのです……いま町じゅうこの話で大騒ぎをしています……なぜと言って、ここの人はみんな必要もないことに大騒ぎをするのですから……のみならず、グルーシェンカのためにも……いや、失礼、アグラフェーナさん……ぼくの心から尊敬するアグラフェーナさん」ミーチャは口をきると、もうさっそくまごついてしまった。しかし、筆者は彼の話を一語一語再録するのをやめて、ただ要点だけかいつまんで述べよう。ほかでもない、三か月前ミーチャはことさら（彼はほんとうに『わざわざ』という言葉を避けて『ことさら』などと言ったのである）、県庁所在地の町に住む弁護士と相談した。『それは、あ

なた、有名な弁護士でコルネブロードフという人です、たぶんお聞きおよびでしょう？　該博な知識をもった人で、ほとんど国家的人物といっていいくらいですが……あなたのことも承知していて……よく言っておりました』とミーチャはまたもや言葉につまってしまった。しかし、言葉につまっても話を途切らすようなことはなく、彼はすぐそんなところを飛び越して、ひたすら先へ先へと駆け出すのであった。

このコルネブロードフは、ミーチャがいつでも提供しうるという証書のことをくわしくたずねて、いろいろと研究したあげく（証書に関するミーチャの証明はきわめて不明瞭で、ここのところは彼も駆け足で通り抜けた）、チェルマーシニャ村は母の遺産としてミーチャに属すべきものであるから、じっさいこれにたいして訴訟を提起し、淫乱じじいをへこますことができる、と断定した。『なぜって、すべての戸口がしまってるわけじゃありません。法律はどういう方面へくぐり抜けたらいいか、ちゃんと心得ていますからね』手短かに言えば、フョードルから六千、いや、七千ルーブリの追加支払いを望むことができるのである。なぜなれば、チェルマーシニャ村は、なんといっても二万五千ルーブリ……いな、確実に二万八千ルーブリ……『いや、あなた、三万ルーブリです。三万ルーブリの価値があります。ところが、どうでしょう。わたしはあの人非人から、一万七千ルーブリも受け取っていないのですからね！……』

「そのとき、わたしは法律事件の処理などできそうにないから、その話もそれなりにしておいたのですが、ここへ来てみると、かえって先方からの訴訟に出あって、あきれかえってものが言えなかったです（ここでミーチャはまたまごついて、やたらに先のほうへ話を飛ばしてしまった）。ところで、あなた、あの悪党にたいするわたしの権利を、いっさいひき受けてくださる気はありませんか。わたしにはただ三千ルーブリだけくだされば、いいのです……あなたはどんなことがあっても、敗訴などになる気づかいはありません。それはわたしが名誉にかけて誓います。それどころか、三千ルーブリの代わりに六千ルーブリか七千ルーブリのもうけをうることができます……しかし、何より肝要な点は、今日すぐにでもこの話を決めていただきたいということです。わたしは、その、公証人か何かのところへ行って……その……つまり、わたしはどんなことでもします。要求なさるだけの証書も引き渡しましょうし、どんな署名でもいたします……ですから、今すぐにも書類を作成してはどうでしょう。できることなら、もしできることなら、今日午前ちゅうにでも……その三千ルーブリをいただきたいのですが……あなたにたてつくことのできる資本家は、この町にひと

りもないのですから、もうそうしていただければ、わたしは救われることになるのです。つまり、あなたはわたしという哀れな人間を、潔白な仕事のために（高尚な仕事と言ってもいいくらいです）、救ってくださることになるのです……なぜって、あなたが単にごぞんじなばかりでなく、親身の父親のように世話をしていらっしゃるあの婦人にたいして、潔白このうえない感情をいだいているからであります。もしそうでなかったら、つまり、あなたのお世話が父親のようなものでなかったら、わたしがこちらへあがるはずはなかったのです。じっさい、なんと言ったらいいか、三人のものがひたいをつき合わしたのです。運命というやつはじつに恐るべきものですなあ、クジマー・クジミッチ！　現実なるかな、現実なるかなですよ！　しかし、あなたはもうとうから除外しなくちゃならなかったのだから、つまり、ふたりのものがひたいをつき合わしたのです。いや、あるいはまずい言い方だったかもしれませんが、しかしわたしは文学者じゃありませんからね。二つのひたいと言ったのは、ひとりはわたしで、いまひとりはあの悪党です。こういうわけですから、わたしかあの悪党か、どっちかひとりを選んでください。いまいっさいがあなたの掌中にあるんです、――三つの運命に二つのくじです……ごめんください。わたしは脇道へはいってしまいましたが、あなた了解してくださるでしょう……わたしはあなたの落ちついた目つきによって、了解してくだすったことがわかります……もし了解してくださらなかったら、今日にもすぐ身投げしなくちゃなりません、まったく！」

ミーチャは自分の愚かな話を、この『まったく』でぷつりと切った。そして、とつぜんいすから飛びあがって、自分の愚かな申し込みにたいする返答を待っていた。最後の一句を発したとき、ふいに彼はいっさいが瓦解したのを感じ、なんともいえぬ絶望におそわれた。何よりも悪いのは、自分が恐ろしいばかげたことを並べたてた、という自覚である。『奇妙なことがあればあるものだ、ここへ来る途中は何もかもりっぱに思われたものが、今はこのとおり、ばかげたことになってしまった！』という考えが、絶望に満ちた彼の頭をふいにちらとかすめた。彼の話している間じゅう、老人は身動きもしないですわったまま、目の中に氷のような表情をたたえて、相手を注視していた。一分ばかり、いらだたしい期待の中にミーチャを打ち棄てておいたのち、とうとうサムソノフは少しの望みもいだかせないような、きっぱりした調子でこう言った。

「ごめんこうむります、わたしどもはそんな仕事をいたしません」

ミーチャはとつぜん、足に力の抜けたのが感じられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb